

5 研究員消息

ドイツ共同決定研究50年

経営学科 教授 増田 正勝

「共同決定」との出会い

山岳部の仲間に誘われるままに入ってしまったのが「市原ゼミ」であった。市原季一先生はまだ40の手前であったが、すでに『ドイツ経営学』（1954年）『ドイツ経営政策』（1957年）『西独経営経済学』（1959年）を上梓され、新進気鋭のドイツ経営学研究者としてすでに学界において確固たる地位を築いておられた。ところが山登りに熱中していた当時、そのようなことをまったく認識していなかった。

ゼミは、大学院並みに、自ら研究テーマを設定して順次報告を行っていくという方式であった。テーマを何したらよいか、西宮甲東園のご自宅をお伺いすると、逆に何をしたいかと聞かれ、西ドイツの共同決定に興味があります、などと適当に答えてしまったばかりに、共同決定と生涯つき合わされる破目になってしまった。

じゃあ文献をもって帰きなさい、と先生は十数冊の洋書を書庫からもってこられた。ほとんどがドイツ語の文献で、しかも分厚い。よく見ると、一番上にやや薄めの英語文献が乗っていた。W.M.Blumenthalの“*Codetermination in the German Steel Industry*”（1956年）であった。Blumenthalはアメリカの労使関係論の専門家で、西ドイツの鉄鋼企業10社の共同決定について実態調査を行い、それをまとめたものがこの文献であった。100ページ余りのものを全訳して3年生の6月に報告した。これがドイツの共同決定との最初の出会いであった。

その後もドイツ語文献を敬遠してもっぱら英語文献を探してはゼミ発表を行っていった。ちょうど学部学生の論集『神戸経営』が創刊され

ることになり、それまでの研究成果を「西独の労使関係」というテーマでまとめて、この創刊号（1962年6月）に掲載してもらった。

「共同決定」にとり憑かれる

4年生になって、一度某機械メーカーの本社を訪問したが、海外登山への想いを断ち難く、就職活動にもいっこうに熱が入らない。そんなとき知り合いの神父が、ベルギーのさる大富豪が日本人学生にヨーロッパ留学のチャンスを提供したいといっている、というビッグなニュースをもってきてくれた。しめしめこれでヨーロッパ・アルプスの登山ができるぞと、市原先生にご相談に上がると、修士課程ぐらいは日本の大学ですませてから留学したほうがいいのではないかとおっしゃる。そんなものかと、素直に先生のご助言に従ったあたりから、人生が思わぬ方向へ向かい始めた。

大学院の試験にはドイツ語もあるというので、卒論研究も兼ねて読み始めたのがO. Blume編の“*Zwischenbilanz der Mitbestimmung*”（『共同決定の中間報告書』（1962年））であった。3部から成る400ページ近い文献であった。第1部「共同決定の歴史」（E.Potthoff）、第2部「共同決定の10年」（O.Blume）、第3部「共同決定の現在と未来」（H.Duvernell）であった。卒論をまとめるよりもこの文献の全訳にほとんどの時間とエネルギーを費やしてしまったが、共同決定の歴史、その実態、そして今後の方向について広く学ぶことができた。

1951年の「共同決定法」（*Mitbestimmungsgesetz*）は企業の最高意思決定機関（監査役会）を労資同権で構成することを規定している。こ

の共同決定制度については、労資対立が激化して市場経済とはうまく調和しないであろう、企業の経営効率をひどく妨げるのではないか、というのが、当時の欧米や日本における大方の見方であった。しかし、共同決定10年の経過を見るかぎり、どうもそのようにはなっていない。むしろ労使関係の安定化と労使協働の促進、さらに生産性の向上に大きく寄与しているのではないだろうか、というのが当時抱いていた感想であった。

「共同決定」の思想的背景へ

ドイツに固有な共同決定制度はいったいどのような思想的背景から生まれてきたのだろうか。少なくともマルクス主義思想の産物ではないし、ましてや自由主義思想の産物ではあり得ない。大学院に入ると、19世紀から労働者の経営参加を提唱してきたドイツ・カトリシズムの社会思想（社会的カトリシズム）に着目し、これを「経営理念の研究—ドイツ・カトリックの経営理念」と題して修士論文にまとめた。結局、このときの研究構想がその後の研究方向を基本的に規定することになった。

経営学の学徒でありながら、共同決定の思想的淵源のひとつである社会的カトリシズムを思想的に研究しようなどとは、今から思えば誠に無謀な企てであった。膨大な資料を集めながらも果たして目的地までたどり着くことができるのか、皆目見当がつかなかった。まるで地図上の空白部に迷い込んだようなもので、登頂ルートがさっぱり分からない。そこでこの未踏の山を「MG峰」と名づけて、気長に挑戦していくことにした。MGとは、デュッセルドルフの西、オランダとの国境に近いところにある地方都市 Mönchengladbach の名前を自己流に略したものである。

この地方に近代的繊維産業を起こしたカトリック企業家 Franz Brandts は、ドイツで初めて労働者代表制を導入した3人の企業家の1人で

あった。しかも社会的カトリシズムの重要な拠点となる「カトリック国民協会」(Volksverein) もここで生まれている。カトリック労働者運動やキリスト教労働組合運動の流れもここで交差してくる。それらの流れをたどっていけばいつか登頂ルートが見つかるかもしれない。そう思って「MG峰」と名づけた。

ところがこの「MG峰」の登頂に成功するのに30年もの歳月を要してしまった。1999年に上梓した『キリスト教経営思想—近代経営体制とドイツ・カトリシズム』(森山書店)がそれであった。すでに還暦を過ぎていた。社会的カトリシズムにおける共同決定思想および所有参加思想の生成・発展を、キリスト教労働組合運動の展開と交差させながら、19世紀にまで遡って描こうと試みたものである。

ドイツ経営社会学・経営社会政策論の研究

「MG峰」を見上げながらいたずらに暗中模索しているわけにもいかないので、別の峰を目指してみることにした。ドイツ経営社会学の創設者 Goetz Briefs の学説が研究の中心になったので、さしずめ「GB峰」といったところであろうか。この「GB峰」は未踏とはいえ、頂上へ導く有力なルートをはじめから確信することができた。1928年 Briefs がベルリン工科大学に創設した「経営社会学研究所」を中心にして、社会的カトリシズムを基盤とする学派が形成されていることに気づいたからである。

ワイマール期における社会的カトリシズムの展開を背景に置いて、Briefs 以下6人の経営社会学者たちの学説を丹念に読んで、そこに共通する問題意識を明らかにしようと努めた。それが1981年の『ドイツ経営政策思想』(森山書店)であった。40代半ばの著作であった。まだ馬力があったのか、着想して7年ほどで研究をまとめている。経営における人間疎外を克服し労働者の主体性を回復するためには、社会的カトリシズムに基づく社会改革とともに、参加型の

経営体制、すなわち共同決定制度の形成が必要であるという主張であった。

経営パートナーシャフトの研究

2010年3月、広島経済大学研究双書第32冊として『ドイツ経営パートナーシャフト史』（森山書店）を刊行していただいた。有難いことだと思っている。いわゆる研究書は出版社がなかなか引き受けてくれない。大学からの出版助成がなければ始めから著作をあきらめていたかも知れない。

第2次大戦後、一群の企業者たちが、企業を経営者・資本提供者・労働者の三者から構成された経営共同体と理解し、労働者の経営参加（共同決定）と利潤参加・資本参加を積極的に推進してきた。今日ではおよそ3,000社において実践されている。これがドイツにおいて「経営パートナーシャフト」といわれる経営政策である。

マンハイム大学に1987年と1998年に遊学した際、お世話になったEduard Gaugler教授の講座図書で、経営パートナーシャフトに関する文献をとくに意識することなく収集させていただいた。その後も文献を集めていたが、これで研究をまとめようと決断したのはずっと後のことで、広島経済大学に来て2年目の2003年頃のことであった。「1年に2本は論文を書きなさい」と若いときに恩師からいわれたことばに、老年に至ってようやく何とか応えることができたというわけである。

ドイツ・キリスト教労働組合史の研究

ドイツ・キリスト教労働組合については1999年の『キリスト教経営思想—近代経営体制とドイツ・カトリシズム』で三つの章を割いているが、いつか独立した著作にまとめたいという野望を持ち続けている。かなりの資料を集めているので、退職後の楽しみにしたいと考えている。最近、南山大学の桜井健吾教授（経済

史）も研究を始められたが、これまで日本のドイツ労働組合史研究では地図上の空白部のようなどころになっていた。ドイツ労働組合運動全般に目を配らなくてはならないので、とてもできそうにないが、夢は持ち続けたい。

チロルにおける反ナチス抵抗運動の研究

インスブルック大学の大学記念碑に、1943年国家反逆罪で処刑されたChristoph Probstの名を見出した。Probstは学生の抵抗運動「白バラ」のメンバーであった。このときからチロルにおける反ナチス抵抗運動に強く関心を惹かれるようになった。これについてはすでに多くの文献もあり、また学位論文も書かれている。インスブルック大学神学部図書館でも貴重な文献に出会うことができた。『広島経済大学研究論集』（2008年3月）に一文を寄せたことがあるが、果たしてどうなることやら。これもまた夢である。

研究と教育

大学・学部の運営に追いまわられて一時研究活動を断念していた時期もあったが、多忙をよいことに結局人間は怠惰に流れるものだということを悟らされた。研究はいわばスポーツ選手にとっての筋トレのようなものである。これを常時やっておかないと肉体も精神もたるんでしまう。知的関心や知的探求心が弱まり、自ずと講義もマンネリ化して緊張感のないものになっていく。

自分の教育力で学生を何とかしたい、何とかできると思い込んでいた時期があった。今にして思うと誠に恥ずかしい。つつい学業成績や就職といった目先の成果にとらわれて学生を評価しがちになる。豊かな人生というものは長い時間をかけてゆっくりと形成されていくものである。そのことをようやく理解できるようになったのは古希を過ぎてからであった。

広島経済大学

地域経済研究所年報

第12号
(2009年度)

広島経済大学地域経済研究所